

【切手デザイン】

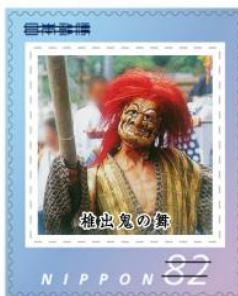
戦国武将 真田幸村とゆかりの地 紀州九度山

いざ、決戦の地へ

幸村

真田三代ゆかりの里・九度山町

KUDOYAMA

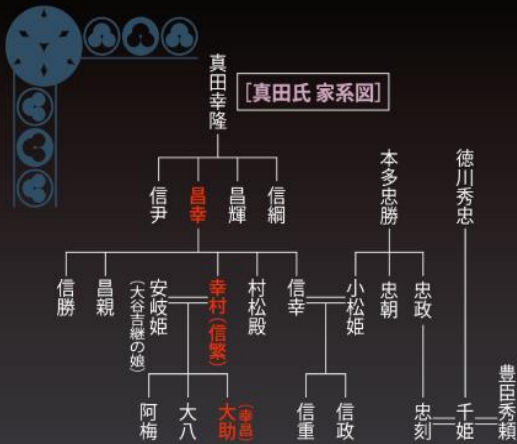


- 切手と写真部分を郵便物に貼って、ご利用いただけます。
- 写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
- 郵便料金納付のためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。



凸版印刷株式会社製

戦国武将 真田氏家系図と真田十勇士



戦国武将真田 二代



くどやまと真田十勇士



真田昌幸 さなだまさゆき
世の動きに合わせて果敢に立ち向い、小国であった真田家を戦国大名として躍進させた知謀の将。九度山にあつては、敵軍によつて国許に居る日を待ちわびる身となり、長男・信之に生活の善しさを訴える手紙など送つていた。慶長16年(1611)願いもかなわず九度山で病死する。享年65歳。

真田幸村(信繁) さなだゆきむら(ぶしげ)
家臣やことも運に囲まれ、地元民とも信頼関係を築いた九度山での生活。父・昌幸とは死別し、弟となり、豊臣方の誘いに応じて大坂城へ向かう時、見張り役の立場でありながら、地元民の協力があって九度山を脱出できたと言われ、幸村に從属した者もあつたそうす。

真田大助(幸昌) さなだたいすけ(ゆきまさ)
慶長7年(1602)、幸村が36歳の時、長男・大助が誕生。九度山での隠棲生活のなかで生まれ育つた大助ですが、幼い時から父と共に川の川で水練を試みたり、文武に励んでいたようす。幸村が大坂入城する際に同行し、最後は慶長20年(1615)、大坂落城となつた時、秀頼の傍で自刃します。

一族を分かち、知略を尽くして戦つたあと…
昌幸は戦国大名として自ら築いた上田城を後にする。幸村は、武将として生きる道を断たれ、蟄居という形で父とともに九度山での暮らしが始まつた…

<p>射撃の達人(様子筋銃)</p> <p>寛十蔵</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>幸村の郎党</p> <p>穴山小助</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>幸村の右腕的存在</p> <p>海野六郎</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>伊賀流忍術の達人</p> <p>霧隠才蔵</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>十勇士で最も人気のある伊賀流忍者</p> <p>猿飛佐助</p> <p>NIPPON 82</p>
<p>元海賊の頭領</p> <p>根津甚八</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>頼継・捨の達人</p> <p>由利鎌之助</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>火薬武器の製造</p> <p>望月六郎</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>元鈴鹿山中での山賊</p> <p>三好伊三入道</p> <p>NIPPON 82</p>	<p>十勇士で最年長</p> <p>三好清海入道</p> <p>NIPPON 82</p>

○ 切手と写真部分を郵便物に貼って、ご利用いただけます。
写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
○ 郵便料金納付のためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。